

第5章 山崎直方の地理教育観

これまでの研究によれば、中学校の量的な拡大がなされたのが、1902年から1931年にかけてであった¹。特に1920年以後は急激な増加を示す(第2章;第2-3図)。この中学校の量的拡大期にあつて、中学校における地理教育の動向を形成したものの一つに、中学校の指導的教員の養成を目的とした高等師範学校の存在が挙げられる。本章で採り上げる山崎直方はその教授陣の一人であつた。また、山崎は1912年から東京帝国大学理科大学教授であり、アカデミー地理学の代表的人物²とも位置付けられており、日本地理学史のうえで、その学問的足跡は大きなものがあつた。山崎は、地理学と地理教育の両分野において重要な人物であつて、このことは当時の地理教育の有り様を象徴的に表している。そのような位置にある山崎が抱く地理教育観は、今日の地理教育の源流の一つと考えられる。

しかしながら、アカデミー地理学者としての山崎の業績についての考究はこれまでに若干はなされているものの、彼の地理教育観についての考察は極めて少ないのが実情である。そこで本章では、山崎が論文等で述べている地理教育観と、実際に中学校で用いられた山崎著作による中学校地理教科書とを比較対照し、山崎の地理教育観の形成過程を検討する。

第1節 山崎直方の業績と先行研究

第1項 山崎直方の略歴と業績

山崎の研究業績と研究動向を概観するために、山崎直方論文集刊行会編『山崎直方論文集 前篇後篇』³(以下『論文集』)をもとに第5-1表を作成した。山崎が生涯に発表した論文は総数大小合わせて約310本に及ぶ⁴。論文等の横軸の区分は『論文集』の目次に従つた⁵。また教科書については、別資料を参考にしつつ、国立教育政策研究所教育図書館による調査によって、著者が作成した⁶。

第5-1表 山崎直方の学術論文と教科書

西暦	山崎に関する主な できごと	外遊	論文等											教科書					
			火 山	地 質 地形	水河	地震 およ び地 塊運 動	考古 学・ 人類 学	人文 地理	地誌	地理 教育	その 他	紹介	合計	外国 地理	日本 地理	地 理 概 論	地 図 帳		
1887								2							2				
1888								5							5				
1889								2							2				
1890								1							1				
1891															0				
1892	帝国大学理科大学入学							1							1				
1893			2					3							5				
1894	東京地質学会をおこす		2	3				1					1		7				
1895	帝国大学理科大学地 質学科卒,同大学院入学		2	2		2							2		8				
1896			3	3		2	1		1						10				
1897				2		1			1						4				
1898	留学(~1902年)	台湾	2	3											5			1	
1899		ベルリン		1				1					2		4				
1900		パリ										1	4		5				
1901				2		2	3		1						8				
1902	東京高等師範学校教 授,東京帝大講師就任	埃,米		1	1				1				4		7				
1903			4										2		6			3	
1904	教科書調査委員		1	3				1	1	1			2		9				
1905				4											4	5			
1906				3		1			2	1	2	2			11				1
1907				4									1		5				
1908	東京帝大で経済地理学 を講義		1	3	2							1	2		9		2		
1909				1									2	1	4				1
1910		清						1				1	3		5		1		
1911	東京帝国大学で地理学 講座開講	伊	4					1					1		6				

西暦	山崎に関する主なできごと	外遊	論文等										教科書					
			火山	地質地形	水河	地震および地塊運動	考古学・人類学	人文地理	地誌	地理教育	その他	紹介	合計	外国地理	日本地理	地理概論	地図帳	
1912	東京帝国大学理科大学教授兼高等師範学校教授			2						1		4		7				
1913	理学博士となる			3	1			1	2	1	3	4		15				
1914			4	3	1					1	2	2		13				1
1915		マニラ, カリリ, マリア		1				1		4		8		14				
1916					1			1	1			3		6				
1917	東宮御学問所で皇太子に地理を講義									2				2				
1918		シナ		1	2			1	1	1	2			8				
1919	東京帝国大学理学部地理学科創設	南満州		1						4	2	1		8				
1920	学術研究会議会員	布哇 (ハワイ)	1							2		2		5				
1921				3						4	2			9				
1922		欧州各国, 北米		2						1		2		5				
1923		豪		3								2		5				
1924				1						1		1		3	2 + 1	2 + 2		1
1925	日本地理学会創設, 地理評創刊	シナ		4			2	1		1		8	1	17				
1926	第3回太平洋学術会議幹事長を務める	シナ		4						3		11	4	22				2
1927	天皇に進講	ハワイ		2			2			3	1	6	7	21				

西暦	山崎に関する主なできごと	外遊	論文等										教科書					
			火山	地質 地形	氷河	地震 および 地塊運 動	考古 学・ 人類 学	人文 地理	地誌	地理 教育	その他	紹介	合計	外国 地理	日本 地理	地 理 概 論	地 図 帳	
1928		欧州， 米国		1		3				2		3	1	10				
1929	兼東京理科大学教授， 逝去			3								2		5				
		年不明								4	3	1		8				
		合計	26	69	8	15	26	8	41	21	89	13	316	7	5	6	4	
			8%	22%	3%	5%	8%	3%	13%	7%	28%	4%	100%					

〔『論文集』，鳥居美和子(1985)：『明治以降教科書総合目録：中等学校篇』国立教育政策研究所教育図書館による調査等によって，著者作成〕

山崎直方⁷は，土木事業の官吏として尽力した山崎潔水（1831-1901）と富貴子の子として，1870年高知県土佐郡旭村赤石（現高知市赤石町）に生まれ，1887年第三高等学校に入学（1892年卒業），1892年には帝国大学理科大学地質学科に入学した。1895年理科大学地質学科を卒業した後大学院に入り，日本の地質学の開祖的存在である小藤文次郎（1856-1935）⁸理科大学教授の指導を受けた。山崎は大学に入学する以前は考古学・人類学に興味を持ち，東京高等師範学校教授に就任する頃まではこの種の論文が集中している。帝国大学に入学した後は，火山，地質・地形に関する研究を本格的に行った⁹。主な論文として，1894年「明治二十七年三月阿蘇の噴出について」（『地質学雑誌』），同年「本邦火山噴出物中に在る堇青石の成因に就きて」（『地質学雑誌』），1896年「妙高火山彙地質調査報文」（『震災予防調査会報告』），同年「大島火山調査報文」（『地質学雑誌』），1898年「北海道火山雑記」（『地質学雑誌』）等がある。

1897年4月に山崎は第二高等学校講師，同年10月同校教授となる。1898年11月から3年間ドイツ・オーストリアに留学し，J. J. ライン，A. ペンクら地理学者から指導を受け，1899年，留学中に第7回万国地理学大会（ベルリン）に出席，1900年には第8回万国地理学大会（パリ）にも出席した。1900年「第七回万国地理学大会参列報告」（『学士会月報』），1901年「第八回万国地理学大会概況」（『学士会月報』）等の報告がある。

1902年2月に帰朝後，東京高等師範学校教授，同年4月には東京帝国大学理科大学講師となった。1902年「氷河果して本邦に存在せざりしか」¹⁰，同年「鳥島火山」（『地質学雑誌』）等を発表した。

1903年には文検問題作成委員，1904年には文部省より教科書調査委員を囑託され，地理教育に関する言説が目立ち始める。1903年「沖縄県下鳥島噴出実査談」(「地質学雑誌」)，1905年「遠江海岸の平原の地形に就きて」(「地質学雑誌」)，1906年「秋吉台のカルストに就きて」(「地質学雑誌」)，1908年「東京湾小笠原島間太平洋海底地質梗概」(「地質学雑誌」)，1911年「再び浅間火山の活動に就て」(「震災予防調査会報告」)，同年「天明三年浅間噴出の実況」(「震災予防調査会報告」)といった自然地理学関連の業績が多い中で，1906年「地図の読み方を習練せよ」(「教育学术界」)，同年「修学旅行につきて」(「教育学会」)といった地理教育に関するものが増えていく。

1911年から東京帝国大学理科大学において地理学講座を担当し，1912年東京帝国大学理科大学教授兼東京高等師範学校教授に任ぜられ，1913年に理学博士の学位を得る。1916年には東宮御学問所御用掛となる。1919年には東京帝国大学理学部に地理学科を設置し，地理学教室主任となった。1922年の国際会議でIGU(国際地理学連合)の設立に参加，副会長の一人に選ばれた¹¹，同年，帝国学士院会員となる。1926年には第3回太平洋学術会議を東京に誘致し組織委員会幹事の役をつとめた。1913年「氷期に関する論争」(「現代之科学」)，1914年「飛騨山脈に於ける氷河作用に就て」(「地質学雑誌」)，同年「高山に於ける雪の営力 nivation につきて」(「東洋学芸雑誌」)，1925年「史前時代以来上総東南海岸の昇降につきて」(「地球」)，等の成果をあげた¹²。1913年「高等中学校の地理学科に就きて」，1914年「地理学説の進歩と中等教育」(「東洋学芸雑誌」)，1918年「時代と地理学」(「学校教育」)，1919年「国民教育に於ける地理学」(「教育学术界」)といった地理教育に関するものもさらに増加している¹³。

総体的に山崎は地形学を重点的に研究し，日本人としては初めて，日本に氷河地形の存在することを指摘し，学界の注目を集めた。火山や地震活動にも新しい見解を提示し，日本の地形学の生みの親となった。論文数からみても，自然地理関連が調査対象総論文数の38%あまりを占めるのに対して，人文地理・地誌に関するものは16%に過ぎないことが，山崎が地形学を専門にしていたことを物語っている。

その一方で，地誌研究で東京高等師範学校の同僚であった佐藤伝蔵とともに『大日本地誌』(全10巻)を編集した。また留学以来，外国地理学者とも交流し，国際会議に出席した。山崎は，日本の地理学の地位向上をはかり，近代日本における地理学の礎を築いた人物であることは疑いがない。

第2項 山崎についての先行研究

日本近代地理学の創始者とされる山崎について，地理学史や地理教育史の研究分野ではどのようにとりあげられてきたのであろうか。先述したように，岡田は山崎を石橋五郎，小川琢治とともに，日本の「アカデミー地理学」の形成者のひとりに挙げている。山崎がデービスやシュナイダー，ウェゲナーの諸説をいち早く日本に紹介し，『地理学評論』を

創刊したことを功績としてあげている。石田¹⁴は、明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向の点から、山崎直方と小川琢治の両者を取りあげて地理学を学問としての出発点に立たせたことを両者の最大の業績としている。吉川¹⁵は、山崎の研究対象を火山地形・氷河地形・変動地形の3つとし、地形学において大きな影響を与えたとしている。しかしながら、山崎の地理学上の業績研究は意外と少なく依然途上にあるといえよう。

また、山崎の地理教育観に言及した研究はさらに少ない。中川¹⁶は、明治30年代における中等学校用地理教科書の中で名をとどめる者として志賀重昂とともに山崎の名を取り上げているが、その詳細な内容分析にはいたっていない。黒川¹⁷は地理教育者である守屋荒美雄との比較において山崎を取りあげているが、山崎の地理教育観が追究されているとは言いがたく、守屋の地理教育が研究対象となっている。岡田¹⁸は小田内通敏との比較において、山崎の地理教育観を取り上げ、小田内が実地観察を重視するのに対して、山崎はそれを重視していなかったことを指摘している。佐藤¹⁹は、いわゆる文検とのかかわりから山崎の教員養成における重要な立場を叙述している。石田²⁰も、山崎が日本の地理教育を方向づける重大な立場にあったが、もう少し積極的に地理教育にかかわるべきであったと山崎の地理教育上における責任について言及している。

このように、山崎の地理教育史上の位置付けを精査したものは依然少なく、山崎の地理教育史における明確な位置付けをなすにはいたっていない。しかしながら、山崎の地理教育における影響の検討を抜きにして、我が国の地理教育史、とりわけ中等教育段階の地理教育史の研究をすすめることはできないと考える。

第2節 山崎直方の中学校地理教育観

第1項 1900～1920年代の時代背景

山崎直方が地理学者として活躍した時期は1900～1920年代にかけてである。国家的視点から捉えると、1904年には日露戦争が始まり戦後の日本はその外債を整理しつつ、他方で軍拡を推し進めていく必要性から国力の充実を図らねばならない時代であった。そこでは産業基盤の整備・拡充が行われる一方で、良民良兵の確保が目指され、中学校教育の充実が求められ、中学校数の増加が求められた。1919年にはヴェルサイユ条約が締結され、翌年に日本は国際連盟に常任理事国として加盟するといった、激動の時代でもあった。さらに、1919年といえば、東京帝国大学において地理学科が地質学科より独立²¹し、山崎はその教授(高等師範学校教授と兼任)となる年でもある²²。1924年には川井訓導事件²³等の教育史上重要な事件があり、1925年には治安維持法が公布される時代でもあった。

この時期は、本論第2章の制度史上の時期区分で見ると中学校地理教育の確立期にほぼ相当し、中学校の数・生徒数ともに急速に増加する時期でもあった(第2章;第2-3図)²⁴。1902年以後、中学校の数は漸増し、1920年以後は急激な増加を示している。これは世界大戦による好況と、1918年の臨時教育会議の決議による高等教育機関の拡張計画が推進され、

それに伴い中学校入学希望者が増加したことが原因とされている。

また、教育全体の動きでは、教育界の動きとして「自由主義教育」が盛んになり、地理教育界においても、雑誌『地理教材研究』が出版され、地理学ではなく地理教育そのものがしだいに取り上げられようになっていく時代でもあった。1908年に京都帝国大学文科大学教授となった小川琢治は1924年に『地球』を出版し、一般読者をも対象とした。その内容には文検受験者対象の講座形式の記事もあったといわれる²⁵。

教育制度上では、1911年の中学校教授要目改正において、各学科目間の連絡をとり、従来の知識注入主義を改めることが規定された。こうしたことは、地理教育においても、詳細な教科書内容記述への行き過ぎに対する注意の意味をもっていた。その一方で、1919年には中学校令改正がなされ、凡ての教科で道徳高揚が求められた時代でもあった。

第2項 文検制度における山崎の役割

こうした時代のもとで、1902年ドイツから帰国した山崎は、東京高等師範学校の教授となる。この時期は、中学校の数・生徒数ともに漸増し(第2章;第2-3図)、それに伴い教員層の充実も求められ高等教育機関の整備も進められていた。当時大学卒業者から中学校教員が補充されるほかに、中学校の教員任用制度として「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」制度(以下「文検」)があった²⁶。

山崎は1903年に「文検」の問題出題委員となり、教員養成の側面から地理教育に大きな役割を果たすようになる。佐藤²⁷によると、文検制度下における地理科は、山崎の文検委員就任以前、就任中、退任後と、その特徴をはっきりと区別しようとしている。山崎以前は多様な基礎的知識を問う内容であったが、山崎が就任してからは自然地理的内容が多く採り上げられた。その間、辻村太郎(地形学)、田中啓爾(地誌)、飯本信之(政治地理学)、佐藤弘(経済地理学)らとともに文検の指導的立場²⁸にあり、地理教員養成のうえで大きな影響を与えていった。

第3項 山崎の地理教育に関する具体的言説

文検の問題作成委員として、地理教育界において重要な地位にあった山崎の言説を、彼が著した論文をとりあげ時系列で具体的に検討したい。

(1) 1913年論文

1913年の論文「高等中学校の地理学科に就きて」²⁹において、山崎は自然地理を重視し、それを学習した後には人文地理を学習するという見解を述べている。

具体的には、「吾人は国民地理学研究の第一歩として先づ此等の自然科学の素地を十分に作らんことを庶幾ふものである」として、自然地理的要素を授業に盛り込むことを主張した³⁰。さらに、

高等中学校に於ける地理学教程の方針としては、本邦を中心として其世界的位置を知らしむるのである、

之が手段として本邦並に特に本邦と密接なる関係を有し、又世界の舞台に於て最も活動せる列国の国勢を明らかにするのである、而して之が研究の方法として先づ此等の国土の自然的特性を審かにするのである、而して其間に働きて常に国勢に変化を及ぼしつつある各種の営力につき獨り其自然的のものに止らず人事上のものにつきては政治経済社会等諸般の方面に涉りて之を観察し、其因果の関係を明らかにすることを力めねばならぬのである

とし、自然地理を理解した上で人文地理を学習し、その因果関係を学ぶべきことを主張した³¹。

(2) 1914年論文

論文「地理学説の進歩と中等教育」³²では、現場の教員が地理学説全般に通暁する必要性を述べた後に、

地理学に於ける程、其教材の変化の甚だしく、且つ速かなるものは蓋しまた勤なからうと思ふのである、地理学に於ける進歩は之を二つの方面に分けて見ることができる、即ち一は事実の変遷で、二は即ち学説の進歩である。〔中略〕而して教育者の口を藉りて始めて生徒に傳はらねばならぬのである、されば教育者たるものは常に此等の新事実の発生に注意し、或いは新刊の雑誌新聞なり、調査報告書なり、或いは政家年鑑・ゴータ年鑑等の類書により、数字上の統計年鑑其他によるとかして教材の刷新を努めねばならぬ

とし³³、変化する教育内容に教師は対応し、生徒にわかりやすく伝えなくてはならないことを強調している。また、

地理学教授に際し事実の穿鑿、研究は須臾も忽せずべからざることであって、その労力は一通りでないと同時に、学説の研究は更に一層の努力を要するものである、中等教育に従事せらるる諸君はよく此等の学説を咀嚼し之を批評するの能力がなければならぬことを繰返して希むたいのである

とし³⁴、学説の研究に教員は敏感になり、その成果に則り中等教育に従事しなければならないとしている。たしかに、学説の動向に敏感であることは好ましいことであるが、通暁してまで授業を行うことを説くのは、山崎にとっての地理教育が、依然地理学と地理教育が未分化の状態にあったことを示すものといえよう。

(3) 1918年論文

論文「時代と地理学」において、

戦争其物は実に社会上最も悲惨なる出来事ではあるが一面に於て地理的知識の普及は慥に其余恵であると謂ふべきものである。〔中略〕海外発展と云ふことは今日の時代に於て各方面の要求するところであり、又吾人は努めて之が実行実現を希望せざるを得ない〔中略〕さて此海外発展を試むるに当りて直接第一に要するものは何であるか、其地方の地理的知識であることは更に言を俟たぬ所である

と述べ³⁵、地理的知識と戦争、海外発展についての関連についての記述が目につき始める。また、海外進出において他国の後塵を拝しないためにも

努めて海外の地理を明かにしなければならぬ、地理の探求を外国人に委ねて其糟粕を嘗むるが如きは幾年待つても大卒の滋味に有りつく時はないのである、須く国民自ら其探求の衝に当り、其研究を其同胞に普及せねばならぬのである、而して兼て先人成功の歴史を尋ね青年指導の示針たらしめたいのである、職に普

通教育に当るるの諸君，幸に微意のある所を酌まれて此等の方面より海外発展の思想を其子弟に鼓吹せられんことをとし³⁶，山崎は海外発展における地理教育の有効性を述べている。

(4) 1919年論文

論文「国民教育に於ける地理学」³⁷では，第1に，自然と人文の関係を重視するという地理学特有の考え方を地理教育に取り入れようとしている。

自然現象と人文上の現象との関係連絡を明かにし国民たるもの自己の国土は勿論他の国土を如何に善用すべきかと云ふことをよく呑みこましたることは普通教育に於て最も大切なことであると思ふ〔中略〕或る自然現象を説明するにしても，自然がどう云ふ風に働いて居るか，どう云ふ風にして如何なる産物があるか，そういう現象が世界何れの地方に於て特に著しいか，之が影響の波及する所は那邊にあるか，之が為め何国が大に利益されてをるか，但しは迷惑してをるか，此等の相互の関係を遺憾なく説明してをるであらうか，之によりて国民の自覚を十分に惹起するだけに教材の運用を巧みにしてあるのであらうか，とし，先にみた1913年の論文「高等中学校の地理学科に就きて」と同様に，自然と人文の関連性を重視している。1913年論文では自然地理重視の立場をとっていたが，1919年論文では自然と人文の関係を捉えることに，より力点が置かれるようになった。

後年，辻村太郎が著した山崎追悼文である「山崎博士と日本の地理学」³⁸においても，山崎が自然地理を重視していたことをうかがわせるものがある。

〔山崎が〕先づ経済及び政治地理学に関しては高等中学校の地理学教育に関連して述べられた説が重要である。此の中では経済地理学者が地文的環境に充分な注意を向けなければならない事を主張して居られるとのべており，山崎の地文(自然地理)重視の姿勢が地理教育観の底流に流れていたことがうかがわれる³⁹。

第2に，地理を有効に社会に生かす必要があることを主張している。

地理の学問を応用致しますれば，随分，われわれが今迄つまらん処であると思つて居りました処でも新富源を得る事も出来ますれば，又従てその土地の価値を高める事も出来るのであります，文明国民は常に斯く自然を利用すると云ふ事を試みて居るのであります，その土地に最も適したものを作りさへすれば労力が少しで効力が多いのであります，何も日本の国内だけに齷齪せず廣く土地を世界に求めれば宜しいのである，食料でも工業の原料でも，製造品でも所謂適材を適所に求むるようになるのが世界的経済のやりかたであるとし⁴⁰，自然にあった開発のために地理を勉強する必要があることを主張している。第3に，山崎は，専門科学と教育が異なることを明確にうちだしている。

専門の学者が之を研究する場合と，教育者が之を生徒に授ける場合に於ては，其の立脚点が自から異なるのであります〔中略〕必ずしも初等教育中等教育に於きまして，むづかしく学理を授ける必要はありませんけれど，唯この国は斯様々々の土地であるから，此様のものが出来る，それが斯くさばける，国際間の位置も那邊に高まつて居ると云ふだけのことは教へたいのであります，小学校では小学校相当の理由を解き，中学校では中学校相当の理由を解く，地理学は決して記述的暗記的のものではない以上くごだしい事実を羅列しても何の効果もないのです，又強てむづかしい理屈を説く必要もないのであります

と専門科学と教育が異なることを指摘している⁴¹。この点は1919年より前では見られない点であり、山崎の地理教育に対する大きな転換であると指摘できるであろう。

第4に、地理教育が暗記に偏ることを注意している。

何が一番大切であるかと云ふに中等教育、初等教育即ち一般に普通教育を受ける時の態度としては先づ世界の今日の状態を普く生徒によく知らしめるのである、吾人の活動の舞台たる今日の世界の形勢につきて正確なる観念を会得させたいのであります、然し正確なる観念を得させると申しても活字引的に何処の国は何所にあつて彼処の産物は何であるとか其処の山、何は何と云ふとか云ふ様な事実を暗記させたいと云ふのではないのであります

とし、字引的に知識を暗記させること、つまり羅列した教科書内容を闇雲に暗記させることで済まそうとする地理教育のあり方に警句を発している⁴²。

以上の山崎の地理教育観を整理すると、この時代特有の考えともいえるが、民族の海外発展に役立つ地理教育の重要性については終始変わらず主張されているのである。

さらに重要なことは1919年とそれ以前で山崎の地理教育観が変化していることである。第1に、1919年以前では地理学と地理教育を区別して考えていなかったが、1919年論文ではそのことをはっきりと分けている点である。

第2に、自然地理と人文地理の捉え方に変化が見られる。1919年よりも前には、どちらかということ、人文現象の理解よりも自然現象の理解を優先し、力点が置かれているようである。しかし、1919年になると「自然現象と人文上の現象との関係連絡を明かにし国民たるもの自己の国土は勿論他の国土を如何に善用すべきかと云ふことをよく呑みこましたることは普通教育に於て最も大切なことである」とし、より自然と人文現象とを関連付けて捉える考え方になっている。

第3に、生徒に正確な知識を伝えることが大切であるが、それが羅列的になって、ただ暗記させるものであってはならないという考えが1919年以降にみられるようになる。

1919年以降、地理学と地理教育を分けて考え、自然と人文現象を関連させて考えていくという見解が、山崎の地理教育観に表れていることがわかるのである。

第3節 山崎直方の地理科教科書の特徴

前節において、山崎の中学校地理教育観をみたが、実際に山崎が著した地理教科書にその教育観は具現化されているのか否かを以下で検討したい。

1919年以降山崎は自然と人文現象を因果的に捉える方法を重視した。また山崎は地理教科書では地名の羅列を忌避すべきであるという考えも持っていた。そこで本章では、自然と人文を関連付ける考え方が教科書にみられるのか、そして、地名の羅列と詳細化にはしていないかの2点に絞り、山崎教科書分析の手がかりとしたい。

外国地理に限定してではあるが、山崎の教科書は第5-5表からもわかるように、何度も版を重ねているものがあり、山崎本人が亡くなった後でも辻村太郎がその意志を受け継ぎ

出版を続け、長期にわたり地理教育界において支持されて来たことがわかる(第5-1図)。

第5-1図

本節では、山崎の地理教科書を比較するために、いくつかの事例とりあげるが、比較考察の内容として、「農業」にかかわる箇所をとりあげた。農業の学習は、自然と人文現象のかかわりを捉える点で、地理学上の重要な方法論を学ぶうる単元であるといえる。そこでは自然現象と人文現象が関連付けられて、農業を教えようとしているのか否かを知ることができる。また、教科書の目次をとりあげることで、地理教科書が詳細化をたどっていったことを示す一つの手がかりをも示したい。

第1項 山崎以前の地理科教科書の傾向

1891年出版の中村五六編纂『中等地理』⁴³では、全434ページ中、洲ごとのページ配分は以下の表のとおりで、アジアやヨーロッパ州に内容が偏っていることがわかる⁴⁴。

第5-2表 中村五六編纂『中等地理』(1891)の目次とページ数

1 亜細亜洲	104	4 北亜米利加洲	51
2 欧羅巴洲	160	5 南亜米利加洲	37
3 阿非利加洲	50	6 阿西亞尼亞洲	27

〔筆者実見により作成〕

中村の記述の特徴は、支那帝国を例に挙げると、位置・境界・区画・海岸線・地勢・山脈・河流・運河・湖水・気候・物産・鉱物・人種・政体・宗教・首府・港口・交通・属島などにわけて記載している。支那の農業を具体的に以下にとりあげる。この教科書には生徒の理解を助けるための地図等は掲載されていないことも付記しておきたい。

支那八古来ヨリ農業ニ注意セシ国ニシテ、今日ニ於テモ皇帝八毎年神農ヲ祭り、躬ヲ鋤ヲ取り田ヲ耕スヲ常則トス、サレハ耕作ノ業大ニ進歩シ、五穀其他ノ各農産物ハ殆トートシテ産出セサルモノナシ、就中北方ニハ小麦、南方ニハ米・茶・綿・砂糖・生糸等ヲ産スルコト夥シク、其年々ノ輸出品額巨額ニ達ス、〔以下略〕

とある⁴⁵。

また、松島剛著1895年『近世小地理学 外国之部』の目次は以下のとおりである。

第5-3表 松島剛著『近世小地理学 外国之部』(1895)の目次とページ数

1 亜細亜洲誌	76	5 亜米利加洲誌	26
2 欧羅巴洲誌	56	6 南亜米利加洲誌	20
3 阿弗利加洲誌	24	7 世界総論(地文地理学・人文地理学)	42
4 阿西亞尼亞洲誌	15	8 附録・地図目録	14

〔筆者実見により作成〕

3ページに一枚の割合で地図、絵などが掲載され、中村の前出の教科書よりも、学習者の理解を助けるように配慮されている。支那を例にとると、位置面積・沿岸・海岸・地貌・河湖・満洲・蒙古・西藏・支那本部・人民・都府・農産・畜産・林産・鉱産・工産・交通・貿易・政治・軍備等にわたって詳細に記載されている。具体的な記述は、

国民は大半農業を営み、揚子江、黄河下流の大沃原、其の他河岸、湖畔の、灌漑に便なる地方は勿論、苟も耕耘すべき所は丘陵山腹たりとも、寸地も之を余さず、然れども、耕作法は、舊法を守り、改良を悦ばず。米、麥、豆、菓実、茶、綿花、煙草、砂糖、蚕糸等を重なる農産とす。製茶は福建省に盛にして、磚菜は、北部支那に於て、貨幣に代用す

とあり⁴⁶、先述した中村の教科書と同様に、自然と人文現象を関連付けた記述がみられない。

1902年山上万次郎編著『最近地理学教科書 外国之部 上中下』では、挿図画は上巻だけで19枚であり、一段と地理教育における挿図の重要性が増していることがわかる⁴⁷。

第5-4表 山上万次郎編著『最近地理学教科書 外国之部 上中下』の目次とページ数

水陸の分布	5	アフリカ	35
アジア	50	南アメリカ	24
オセアニア	25 (以上上巻)	北アメリカ	12
ヨーロッパ	94 (中巻)	世界地理総論	17 (以上下巻)

〔筆者実見により作成〕

南部は米、北部は麦・大豆を産し、阿片・蚕糸・茶・綿の産も亦多し。牧畜は盛んにして、騾及び驢は北部に、駱駝・綿羊・山羊は蒙古に、豚は到る所にこれを養ふ。鉱物には鉄及び石炭の非常なる量あり又東洋特有の玉はクンルン山系より出づ。絹織物及び陶器の製造は南部に盛んなり〔以下略〕⁴⁸

記述内容は、前二者とさほど変わりはない。このことから、山崎以前の地理の教科書では、自然と人文現象を関連付けない記述が主流であるといえよう⁴⁹。

第2項 山崎直方の地理科教科書

(1) 1900年代の教科書

山崎が執筆した中学校地理教科書を第5-5表にまとめた。とくに1905年の外国地理教科書は何度も改訂され、山崎が中学校教科書を通して、中学校の地理教育に影響を与えたことが推察される。

第5-5表 山崎直方が著した中学校地理教科書

初版年	著者・補訂者	著書	出版社
1898	山崎直方	地文学教科書	金港堂
1903	山崎直方	普通教育地文学教科書	開成館
1903	山崎直方	普通教育地理学教科書 地理学通論	開成館

1903	山崎直方	修訂普通教育地理学通論	開成館
1905	山崎直方	外国地誌 上中下	開成館
1905	山崎直方	普通教育外国地理教科書	開成館
1905	山崎直方	普通教育世界地理 上中下	東京開成館
1905	山崎直方	普通教育世界地理教科書 上中下	東京開成館
1905	山崎直方	普通教育地理学教科書 地理学各論 外国誌	東京開成館
1906	山崎直方	普通教育外国地図	開成館
1906	山崎直方	普通教育世界地図	開成館
1908	山崎直方	普通教育地理学教科書(地理学各論, 日本地誌)	開成館
1908	山崎直方	普通教育日本地理	開成館
1909	山崎直方	普通教育日本地図	東京開成館
1910	山崎直方	普通教育 日本地理教科書	東京開成館
1915	山崎直方	普通教育提要地理学通論	開成館
1924	山崎直方	新制綱要地理学通論	東京開成館
1924	山崎直方	新制日本地理	東京開成館
1924	山崎直方	日本地理綱要	東京開成館
1924	山崎直方	新制世界地理 上中下	東京開成館
1924	山崎直方	世界地理綱要	東京開成館
1924	山崎直方, 辻村太郎補訂	新制日本地理 甲表	東京開成館
1924	山崎直方, 辻村太郎補訂	新制外国地理 甲表	東京開成館
1924	山崎直方, 辻村太郎補訂	新制外国地理 乙表	東京開成館
1926	山崎直方	新制日本地図	東京開成館
1926	山崎直方	新制世界地図	東京開成館
1933	山崎直方, 辻村太郎補訂	新制日本地理 乙表	東京開成館
1934	山崎直方, 辻村太郎補訂	新制地理学通論	東京開成館

1905年の『普通教育地理学教科書 地理学各論 外国誌 上中下』の目次は以下のとおりである。配列をアジアから始めるところは、中村をはじめとする当時の教科書と同傾向を示し、この時代の共通のものと考えられる。目次をみると前時代のものよりも、かなり詳細化していることがわかる(第5-6表)。

第5-6表 『普通教育地理学教科書 地理学各論 外国誌 上中下』〔1905〕と『新制世界地理 上中下』〔1924〕(1928年4訂版を参照)の目次 (数字は頁をあらわす)

『普通教育地理学教科書 地理学各論 外国誌 上中下』〔1905〕	『新制世界地理 上中下』〔1924〕
アジア 総論	満州
地文 1	関東州 1
人文 1 2	満州 6
東南アジア	アジア
韓(朝鮮) 2 0	総論
清(支那) 3 2	地文 1 6
南部アジア	人文 2 4
インドシナ半島 7 0	東部アジア
マライ半島 7 7	支那 3 1
インド(印度) 8 1	南部アジア
北部アジア並に中部アジアの一部	インドシナ半島 6 5
アジア=ロシア 8 9	マライ諸島 7 5
西部アジア	インド 8 2
イラン地方 1 0 4	西部アジア
アジア=トルコ 1 0 6	イラン地方 9 3
アラビア 1 0 9	アラビヤ 9 5
オセアニア	アジアトルコその他 9 8
オーストラリア 1 1 3	北部アジア並に西部アジアの一部
ポリネシア 1 2 2	アジアロシア 1 0 3
メラネシア 1 2 5	シベリヤ 1 0 4
ミクロネシア (以上上巻) 1 2 7	中央アジア 1 1 5
	コーカシヤ 1 1 7 (~ 1 1 9) 以上
	上巻
〔中・下巻省略〕	

〔筆者実見により作成〕

図表・挿図なども中村の教科書と比べて格段に多くなっている。上巻だけで72枚で、詳細な絵や、写真、地図なども用いられており、一層生徒の地理理解に役立つように配慮されている。図表を利用することは、後の地理教育では欠かせないものとなっていくので、山崎の教科書がひろく用いられた理由はこうした図表が当時の教科書の中では優れていたところがあったからと考えられる。以下、支那の農業の部分⁵⁰を引用する⁵¹。

国土広大にして、地形風土到る処に異なるが故に、天産の種類亦同じからず。国民の生業亦従ひて一様ならず。支那本部は、農産に富み、殊に其西北部を除くの外は到る処米を産し、揚子江流域並に南清地方には茶、綿、砂糖等を産し、蚕業亦各地によく行はる。西北及び満州は豆、高粱の産を以て名あり。牧畜は支那本部の北部より蒙古、新疆、チベット等、荒漠の地方に行はれ、騾馬、駱駝、羊等は遊牧種族に主として飼養せらる。又豚は殊に支那本部、満州にありて最も主要なる家畜なり。水産は到底其国内の需要を充たす能はざる故に、本邦より其輸入を仰ぐこと少なからず。鉱産は豊富にして、殊に多量の石炭と鉄とを有すれども、其採掘未だ十分ならず。従ひて之に随伴して起るべき彼のヨーロッパ、アメリカ等に盛なる大工業は、未だ此地に振はずして、讒に近來揚子江の流域地方に製鉄、紡績、織布等の事業漸く興るに至れり。要するに此国は各種の天産饒にして、莫大の富源を有するに係らず、其利用の途未だ開けざるの憾あり。されど国民は又工芸に秀で、陶器、絹布の如きは、古來其精巧を以て知られ、且つ多額の産出あり。

1908年初版『修訂普通教育日本地理教科書』⁵²では、「本書は特に此点に留意して、地文、人文に関する教材の配合に深き注意を加へ、努めて叙述の一方に偏せざらんことを期せり」と例言にあるが、「関東地方」は以下のとおりである⁵³。

気候温和にして土地肥沃なれば、農業最も開け、米、麦、大豆の産甚だ多く、埼玉・千葉・茨城の三県に殊に盛んなり。煙草の栽培は栃木県の東部より茨城県に亙り、最も盛んにして、神奈川県之に次ぐ。

「山梨県」でも、

甲府市は盆地の中央にありて、県庁所在地たり。生糸は其生産物をなし、又水晶細工等の特産あり。盆地の東部は葡萄の栽培盛にして、殊に勝沼附近其中心たり。中央線は甲府より西北に進み、八ヶ嶽の裾野を走り、長野県に入る。鰍沢は富士川に沿へる要津にして、其南方なる身延山には日蓮宗の本山あり。

と記載されている⁵⁴。

このように、山崎の教科書はそれ以前の教科書よりも詳細に記述されることになったが、自然と人文現象が関連付けて記述されているとは言い難いのである。

当時の山崎以外の教科書をみると、三省堂書店『最近外国地理 上中下』では、

〔アメリカの〕国民の生業は農業を第一とし牧畜・採鉱・工業等亦何れも盛なり、農産中綿花・玉蜀黍・小麦・煙草の産は何れも世界第一に位し、又柑橘・林檎・葡萄・鳳梨等の収利亦多く、森林も豊富なるこ

とカナダに次ぎ、鉄・石炭・銅・石油は共に世界の首位を占め金・銀亦多し、原料斯の如く豊富なる故に工業従て盛大にして綿布・毛織物・皮革・機械等の製出多し

とある⁵⁵。こうした地名と物産を羅列する傾向は、六盟館編集所『修訂外国新地理 上中下』⁵⁶、山上萬次郎『最近統合外国地理中学校用 上中下』⁵⁷、志賀重昂『地理教科書 外国篇 上中下』⁵⁸でも同様であった。

1902年の「中学校教授要目」において、授業における直接観察の重要性をのべ、細密繁多なことを記憶させることに対しては注意がなされ、1911年の中学校教授要目改正でも、各学科目間の連絡をとり、注入主義を避けることが規定されていく。つまり、1905年で内容が詳細化される傾向が続き、さらに1910年代に入っても続いたことがわかる。そしてその傾向は山崎に限ったことではなく、中学校地理教科書の支配的傾向だったと考えられる。法令上で詳細化を戒めたにもかかわらず、一向に直らなかつたことがわかる。

先述した論文「国民教育に於ける地理学」⁵⁹で、地理教育が羅列的な知識を暗記させがちになることに対して注意を促している。また山崎著『普通教育外国地理教科書』（開成館）でも、1913年の論文「高等中学校の地理学科に就きて」で述べているように、単純に事実を羅列することを戒めている。また、1905年の『普通教育世界地理 上中下』の例言でも「地文・人文に関する教材の配合に深き注意を加へ、叙述を偏せざらしめ、〔以下略〕」としている。

しかし、実際の教科書では、地文、人文を関連付けて記述したものはみられず、逆に詳細化は進み、暗記ではない地理科への具体的提示はなされていない。山崎は自然地理を基礎とした上で、人文地理を教えるという構図を重視し、知識をただ暗記することを厳に戒めたが、教科書における記述内容は、実際には詳細化し、両者を関連付けた記述はなされていないのである。

無論地理知識の内容が詳細化することは否定すべきことではないが、詳細化した知識をどのように地理的な思考につなげていくかの方法を提示しなかつた点が、地名や物産を単に暗記させる地理教育へとつながる道をひらいてしまったと考えられる。

また、自然と人文を関連付けることの重要性を述べていながらも為されていない上に、地図を有効に使用する面においても教育的視点が欠けていると言わざるを得ない。山崎直方『普通教育世界地理上中下』⁶⁰の例言では、「本書の教授に必要な地図類は、本書附属の『普通教育世界地図』に輯録せるが故に、本書には多くの地図を掲げず」とある。

しかし『普通教育世界地図』（開成館発行1906年初版、1915年11版を参照）をみても、色刷りの地図が約21ページあるが、自然と人文現象を関連付けて考えさせるような地図は見当たらない。地図帳と教科書の連携もうまくいっておらず、結局は不完全なものであったと考えられる。

(2) 1920年代の教科書

この時期の教育制度では、1917年9月、臨時教育会議が開かれた後、教育制度は大きな

変革を受けることになる。すなわち、1919年の中学校令改正、1920年の高等女学校令施行規則改正がなされ、教育において「国民道徳の養成」が強く求められた。また前出の図1からもわかるように、中学校の数や生徒数が増加する端緒の年であることがわかる。

この時期の山崎の地理教育観をみてみると、1924年の『新制外国地理 乙表』の例言には、規則改正の影響がはっきりとあらわれ、「東亜の一角に昇天の国威を示す我が国は世界に比類なき国体を有し、イギリス・アメリカ合衆国と世界の三大強国の一に数えられている」とし⁶¹、国威発揚を意図する記述になっていることがうかがえる。実際に、その教科書の目次をみると、関東州や満州の項目が先頭に来ており、日本の進出先としての両地域を重視していることがわかる。

また、1920年代の教科書は1900年代の教科書と変わらずに詳細な記述が目につく。例言では、新たに「人文地理を重んじ、殊に列国産業の現勢を審らかにするため、産業に関する記述を新たにし、単に羅列的に失せず、努めて教材を有機的に統合して会得せしめるやうにした」とあるが⁶²、実際の教科書では部分的にしかみられない。

たとえば、先に取り上げた「アメリカの農業」についてみれば、以下のようなになる。

農業は甚だ盛で、メキシコ湾岸からカナダに至る大平原は、南は暖帯、北は温帯で、玉蜀黍・甘蔗・綿・煙草・小麦等が風土に応じて栽培せられ、農場の組織・耕耘・収穫の方法がすべて大仕掛で、玉蜀黍・綿・小麦はいづれも世界第一の産額がある。

たしかに、印刷技術の進歩により、1905年の教科書よりも彩色がほどこされ、より鮮やかに見やすくなり、教育効果もあがると考えられる。

しかし、アメリカ合衆国農産分布の地図は掲載されているが、気候に関する地図や地形断面図などとは離れたページに掲載されており、自然と人文現象の因果関係を考えさせるうえで不便であるといえよう。これは、南アメリカの産業分布等にもいえ、他地域でも同様である。アメリカの農業は本来ならば自然と人文の関係を考えさせる上で適した教材と考えられるが、自然と人文現象を関連付ける説明がなされていない。自然と人文の関係を考えさせるというよりも、その地域の知識を伝えるだけにとどまっていた。

また、日本地理についても、同様なことがいえる。1926年訂正22版『普通教育日本地理』⁶³の例言では、

凡そ国家人文発達の程度は、その位置・地形・気候等自然の形勢と関連する所極めて大なるが故に、本書は地文・人文に関する教材の配合に深き注意を加へ、努めて叙述の一方に偏せざらんことを期し、また地理学の学修多きものたらしめんがために、乾燥なる記載的叙述を避けんことを努めたり

とある。具体的な記述としては「関東地方」では、

平野広潤にして、気候良好なれば、農業よく開け、米・麦・大豆の産甚だ多く、埼玉・千葉・茨城の三県に盛んなり。煙草の栽培は栃木県の東部より茨城県に亙りて、最も盛んにして、神奈川県これに次ぐ。蚕業は群馬・埼玉最も著れ、機業これに伴ひてまた盛なり。北部には鉱業・製錬業盛に行はれ、足尾よりは銅、日立よりは銅及び金銀を産し、また常磐炭田あり」

とある。また、「奥羽地方」の記述では、

蚕業は農業を主とし、米・麦・大豆・馬鈴薯を産す。また、福島・山形二県は蚕業盛にして、太平洋岸の四県は牧場多く、馬を産す。鉱産は秋田・岩手・福島に盛にして、秋田の銅・銀、岩手の鉄殊に多く、福島の常磐炭田、秋田の油田また著る。北部の三県は林産と林檎とを以て知られ、太平洋岸は水産に富みて、金華山沖には捕鯨行はる

とあり⁶⁴、地名物産を並べた記述内容となっている。

たしかに山崎は1919年の論文で、自然と人文現象を関連付けて地理を教えることを説いていた。しかし、実際には山崎の中学校教科書では、自然と人文を関連付けた教科書記述がみられず、自然と人文をいかに関連させて捉えるかという地理学特有の方法を述べることなく終わってしまった。その一方で、地理知識の詳細化が一段とすすみ、暗記科目として位置付けられてしまう契機をつくってしまったと考えられる。

地理科が詳細化された知識を暗記する傾向について、青野は、「地理的内容は江戸時代においても国々の地名や物産を教えることが主力であり、明治時代もここに力点がおかれ無味乾燥な暗記科目とされ、有識者からも批判を受けていた」としている⁶⁵。また同様に「地名羅列されたものを暗記する科目が地理科⁶⁶であった」と石田も指摘している⁶⁷。江戸時代、明治時代そして今日においてもみられる、いわゆる地名物産を羅列し暗記させる地理教育が山崎の時代において既にみられていることに留意する必要がある。

第4節 山崎直方の地理教育観成立の要因

山崎は地理教育についての諸論文で、人文現象と自然現象の関連をもたせることの重要性を説いている。しかしながら、山崎の著した中学校地理教科書を検討すると、その主張が教科書に明確に表れているとは言いがたい。結果として教科書において、自然と人文現象を関連付けない記述が多くなり、内容も詳細になって知識暗記偏重になったと考えられないだろうか。こうした自然現象と人文現象を相関的にとらえず、地理的な説明を伴わない教科書記述が中学校地理教育草創期にみられ、山崎の地理学上の重要な位置付けともあいまって、戦前地理教育の動向を決定づけることになったと考えられるのではないか。ではなぜ山崎が目指したものと教科書の間食い違いが生じたのであろうか。以下この点について考察したい。

第1項 専門科学と地理教育との関わり

自然と人文現象の因果関係をとらえることは、地理科にとって重要な方法論のひとつであろう。この点は山崎も述べていることである。のちに、山崎は東京文理科大学地理学教室設立に尽力し、「内外の学界を洞察して、東大に於て実現し得られなかつた諸点の具現に大いに努力せられたようで、自然地理学・人文地理学の各一講座の設置も亦その一つと思われる」⁶⁸とあり、山崎も両分野の必要性を認めていた。

しかしながら現実には、自然と人文現象を関連させた教科書を出版することが困難であったであろうことが、守屋荒美雄(1872-1938)の言からも裏付けられる。守屋は、1898年文検に合格し、中学教師をしつつ教科書執筆を行い、1917年には帝国書院を創設し、今日に至るまで地理教育に影響を及ぼし、山崎とは違った形で地理教育に影響を与えた人物である。大学アカデミズムではない、在野の目からみた守屋の地理教育観からすれば、山崎をはじめとする地理学者たちが作り上げた日本の地理教育は内容が偏ったものであると述べている。すなわち、当時の地理教科書は地文と人文的要素を関連付けておらず、地文(自然地理)重視のものが多く、その原因を当時の地理学の世界が地質学や鉱物学の研究者に大きく依存していたからと指摘しているのである⁶⁹。明治期の地理教育が自然地理の影響を強く受けたことで、人文と自然のバランスのよい記述に欠け、両者を関連付ける内容記述ではなくなると指摘しているのである。

さらに、石田も、「自然地理学の研究には人文地理学あるいは人文・社会諸科学の動向や基礎的知識がなくても特に差し支えないが、人文地理学の研究者にとっては自然地理学の成果が必要である」⁷⁰とし、自然地理学の人文地理学に対する独立性を指摘している。このことは、人文地理学を専攻する者が書いた教科書では自然人文両現象を盛り込んだ教科書ができやすいが、逆の場合にはそうではないことを暗示する。

自然と人文現象を関連付けた記述をともなった教科書を目指しながらも地名羅列的で詳細化し、その知識を関連付ける教育的見地を持たなかった理由は、山崎が専門とした自然地理学、彼の場合には、地形学の学問的性格にあるのではないか。地理学の分野が、自然地理学、とくに地形学に重点がおかれていたことに関係があるのではないであろうか。

『東京大学百年史』によれば、山崎が主宰する東京帝国大学の地理学教室における研究の主流は自然地理学とくに地形学であり、山崎直方は関東大地震の際に生じた地殻変動を調査するなど、その研究活動は地形学であった⁷¹。助教授であった辻村太郎も、断層地形の分布に基づいて日本の地形構造を研究するとともに、海岸地形の諸類型の成因に関する研究を発展させていた。かくして、日本における地形研究の基礎が確立されてきたが、それは自然地理学のなかの地形学であり、自然科学的な事実の客観化、細分化と詳述化を伴っていた。このことから、山崎の地形学には、人間の生活を重視する視点は少ないのではないだろうか、以下代表的論文をとりあげて例証したい。

論文集に掲載されている自然地理に関する論文の中から、代表的論文「氷河果して本邦に存在せざりしか」をとりあげる⁷²。

今日は日本に氷河があつたかなかつたかと云ふことに就て暫時清聴をしたいと思ふのであります。今日吾々が両極地方へ参りますれば、陸地から海面へかけて一面に氷が敷渡つて居るを見ることが出来る。そこには大きな氷の原があると云ふことは無論どなたもご承知のことでございます、然し今日氷の恒に融けずにありまする所は単に両極地方と限ては居りませぬ。温帯地方に於きましても、或は熱帯地方に於きましても、水平線上若干距離に上れば到る処氷を見出すことが出来るのであります、熱帯地方に於きましても平均四千二百乃至千七百メートル位の所に参りますれば、始めて雪の在る所を見ることがで

きます。〔以下略〕

以上の記述からみて、人文現象と自然現象を関連付けるといふ考えは、成立しにくいと思われる。山崎は細分化する地理学の中の地形学の分野を開拓してきたが、教科書執筆にあたって、こうした学問研究方法の影響がでていたといえるのではないか。東京帝国大学において地理学は理学部に置かれ、草創期の地理学においては自然科学を背景とする自然地理学への傾斜が必要であったことを考慮すべきことかもしれない。

山崎が活躍した明治時代における専門科学、学問の特質は、丸山⁷³ものべているように学問間の連絡が欠けている状況、いわゆる「たこつぼ型」といわれる個別化の過程でもあった。吉川⁷⁴も、学問における領域性と記述の演繹的形式という二つの特性をとりあげ、科学が陥りがちな弊害を指摘している。このことは、学問一般にとどまらず、近代地理教育草創期においても、地理的な視点である自然現象と人文現象に関連性をもたせることに困難を伴ったことを暗示するといえよう。

また渡辺⁷⁵も日本における近代科学の導入と西洋の学術文化の摂取における問題点を指摘している。そのひとつに、「西洋の学術文化の諸分野の相互間にわたる密接な関連性を顧慮することなしに、専門細分化した各分野を個々別々に学び取ってきたこと」があると指摘するように、当時の情勢は科学ならびに研究の体制を急速に整備する必要があった。そのような理由から、学問間に閉鎖的な傾向があったとみられる。学問の本質的な性格が教育に影響を与えていったと考えられる。

第2項 教育制度からの影響

米田によると、「明治時代の中等教育は一部の上流・中流の国民だけに高度な教育を施すという場であり、その教育内容に通底していたものとして、アカデミックな普通教育への強い志向がある」⁷⁶と学問と教育の関係を指摘している。当時の中学校地理教育の傾向は、学問と教育が未分化の状況で、専門科学からの影響が強かったと考えられる。中学校進学者の増加による中学校の大衆化によって知識の中・下層からの教育への需要が出てくるまでは、地理教育草創期においては上からの知識下達の側面が強かったといえる。したがって、山崎をはじめとする学者たちの考えがそのまま、地理教育に影響を及ぼしたのである。

阿部も指摘しているが、まず、1891年の中学校令によって尋常中学校を府県において一校を設置すべきものとし、郡市町村も設置しうるようになり、それ以後増加率が顕著となる。その後も中学校数と生徒数は増え続けるが、1899年の中学校令により尋常中学校は中学校と名称を変え、それまで実業教育と高等普通教育の両側面が求められていたが、「学科目は学問的内容に傾き、従来の二個の目的に適応せんとする努力」⁷⁷をやめた形になった。すなわち、教育内容が学問に傾斜することになり、中学校は質的变化を遂げることになる。しかし、地理科においては、地理学の方法論が導入されることには不完全であり、内容を詳細化したものが支配的になったと思われる。

山崎は意識しなかったと思われるが、阿部が指摘している「学校教育で取り上げられる

内容が学問に依拠しがちになる傾向」は、山崎の地理教科書においてもみられ、山崎の学問の自然地理学における個別化、詳述化の傾向を反映し、内容的にも自然と人文を関連付けられない記述方法が中心となっていたと解釈したい。

しかしながら、山崎の教科書への支持は大きなものがあった。山崎が学問と教育上の立場において影響力が大きかったことによるものと考えられる⁷⁸。山崎の地理学上の重要な位置付けと、地理教育上の位置付け、つまり、東京帝国大学教授、日本地理学会初代会長、文検の出題者としての活躍、文部省教科書調査委員であったことが地理教育に大きな影響力をもったのではないか。特に文検委員として教員養成の側面での大きな影響力は、教科書の増刷、改訂の回数からも推察できるが、石田龍次郎は、「地理教育とは何か、何が教えられなければならないかを研究することが、おろそかになった責を負わねばならないかも知れない」と山崎を痛烈に批判したことも事実であり⁷⁹、山崎が地理学の成果を適切に教育に盛り込まれなかったことが、のちの地理教育に一定の方向性を与えた可能性も指摘できるのである。

第3項 山崎以後の教科書内容の変化

山崎が逝去した後、その学問的成果を引き継いだのが、辻村太郎であった。辻村は、山崎の教科書を多く補訂している。補訂した教科書には、山崎の考えを生かしながらも、大きな変更が見られる。たとえば、『新制日本地理』⁸⁰（1937年15版）の例言では、「〔故山崎博士の意志をついで、と断った上で〕人文地理を重んじ、殊に内外の産業の現勢を審かにするため産業に関する記述を新たにし、単に羅列に失せず、努めて教材を有機的に統合して会得せしめるやうにした」と例言に述べ、「関東地方」では、

平野が広く、地味が肥え、且つ気候も温暖であるから農業が盛である。関東平野は低地に比して台地が

広いため、水田よりも畑地が多い。米は低地の多い茨城・千葉二県に多く、他の諸県は麦類の産が多い

という記述や、「都市の発達につれて東京附近には鶏・豚・乳牛等の飼育が行はれ、また房総半島及び伊豆諸島にも乳牛が飼育され、乳酸品を産する」というものもあり⁸¹、自然と産業を関連付ける記述になっていることがわかる。

山崎が亡くなったあとに、こうした教科書が出版されたという事実は、山崎の地理教科書記述の限界を辻村が乗り越えたことを例証する。

第5節 地理教育史における山崎直方の位置付け

山崎直方は、自然現象と人文現象を関連付けてとらえるという地理学特有の視点を、地理教育にも導入しようとした。これにより山崎は中等教育における地理教育の先駆者といえる。しかし、山崎の考えは、教科書には必ずしも反映されてはいない事実があり、知識を教材化する視点が欠如していたといえよう。その結果として、山崎の教科書は自然と人文に関する事象を関連付けずに羅列並列的に叙述し、詳細化した教科書の内容構成となっ

た。

その理由は、彼の専門が地形学であるということや、地名知識をいちやく人々に普及させるという当時の地理科に対する時代の要請も推察される。

一方で、山崎と同時期に活躍した、人文地理学を中心として活動した小川琢治の外国地理教科書が分布図理解を通して、自然と人文現象を結びつけるという地理学的見地を伴った教科書になっていた。地形学を専門とする山崎と人文地理学を中心とする小川の学問方法が、それぞれの地理教育観に反映されたという解釈が可能なのではないか。また、小川はその知識伝達の手法においても、分布図を適切に用いて、山崎の教科書よりも地理学の教育的価値をより明確にうちだしていた。こうしたこと背景には、東京帝国大学において地理学は理学部に置かれ、草創期の地理学においては自然科学を背景とする自然地理学への傾斜が必要であり、小川のいた京都帝国大学では地理学の講座が文学部に置かれ諸分野との整合性や協力関係を得る必要がある歴史地理学への傾斜があったことが背景にあると考えられる。

【注】

-
- 1 阿部重孝「中学校」『阿部重孝著作集第4巻』日本図書センター,1983,178-183頁。
 - 2 岡田俊裕『地理学史』古今書院,2002,30-34頁。
 - 3 論文集の内容は、火山に関する研究が11,地質・地形に関する研究が13,氷河に関する研究が4,地震及び地塊運動に関する研究は11,考古学及び人類学に関する研究7,人文地理に関する研究が7,地誌に関する研究が3,地理教育に関する研究が4本掲載されている。
 - 4 岡田は「山崎が一時期発表論文の減少理由を研究以外に多忙であったことを指摘している(前掲2),33頁)。
 - 5 「その他」には追悼文や会議報告などが含まれる。山崎が政府や文部省に対し日本地理学界を代表する立場にあったため、この種のものが増えたと考えられる。
 - 6 1は、山崎著作で辻村太郎補訂の教科書2冊をあらわす。2は、山崎著作で辻村太郎補訂の教科書1冊をあらわす。
 - 7 山崎の妻の水田光子(1882-1964)は熊本県出身で、女子高等師範学校卒業後、東京高等師範学校付属小学校訓導として音楽を教えた。1916年『お囃の仕方』『お囃の研究』を刊行し、昔話の口演方法と構造分析を行う。のち『イソップ寓話集』『世界童話集』を編集。神話学者の松村武雄(1883~1969)は義弟である。
 - 8 島根県津和野町出身。藩校養老館で学んだ後、1879年に東京帝国大学地質学科第一期生として、ナウマン博士について地質学を学んだ。翌年ドイツ留学を命じられ、ライプツィヒ大学、ミュンヘン大学で地質学を研究した。1884年に帰国後、同年発見した玄武岩を兵庫県の玄武洞の名にちなんで命名するなど活動し、1886東京帝国大学地質学教授、1887世界で初めて紅簾石片岩を報告し、1888年に日本最初の理学博士となった。1891に起きた濃尾大地震では断層地震説を主張し、このとき撮影された写真は世界中の教科書に採用された。日本地質学の草

分けとして東京学士院会員など多くの要職を歴任，研究は国際的に高い評価を得た。1922年に東京大学名誉教授の称号が授けられ，退官後も研究を続けた。享年79歳(墓誌には80歳)。師はナウマン(E. Naumann, 地質学)の他に，チルケル(F. Zirker, 岩石学)，クレドナー(H. Credner, 地質学)が，大学時代からの友人として和田維四郎，原田豊吉，横山又次郎，渡辺渡，神保小虎らがあり，後継者として，山崎直方，小川琢治，伊木常誠，井上禧之助，脇水鉄五郎，江原真伍，神津淑祐，加藤武夫，矢部長克，坪井誠太郎らがいる。

- 9 山崎が1902年に発表した「氷河果して本邦に存在せざりしか」はのちの，いわゆる氷河論争をひきおこした。しかし，氷河に関する山崎の論文は意外と少ないことがわかる。
- 10 山崎直方「氷河果して本邦に存在せざりしか」『地質学雑誌』第9巻，1902。
- 11 田中啓爾は，山崎が「生まれながらのコンgresマン」と言われたほど国際会議の組織委員として適役の性格をもっていたことを書いている(田中啓爾「山崎直方先生の追憶」『第三地理学論文集』田中啓爾先生謝恩記念会，1965，745頁)。
- 12 その他に，1925年「関東地震の地形学的考察」(「震災豫災調査会」)，1925年「但馬地震の震源」(「地理学評論」)，1926年「断層地形の自然的模型」(「地理学評論」)，1926年「房総半島東南部に於ける傾斜地塊に就きて」(Jour. Fac. Sci. Imp. Univ. Tokyo)，1927年「琵琶湖附近の地形と其の地体構造に就きて」，「一九二七年奥丹後地震(欧文)」，1928年「地震と地塊運動」(「理学界」)，1928年「地塊の活傾動」(「地理学評論」)，1929年「地塊運動の緩急」(「日本学術協会報告」)などがある。
- 13 1916年ころから海外進出に対する積極的な言説が目立つ。
- 14 石田龍次郎「明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向」『地理学評論』44-8，1971，539頁。
- 15 吉川虎雄「山崎直方先生と変動地形の研究」『地理学評論』44(8)，1971，552頁。
- 16 中川浩一『近代地理教育の源流』古今書院，1978，278頁。
- 17 黒川孝広「守屋荒美雄の教育観の研究 地理教科書の例言と項目比較を通して」『吉祥女子中学・高等学校研究誌』32，2000，243-258頁。
- 18 岡田俊裕『日本地理学史論 個人史的研究』古今書院，2000，148頁。
- 19 佐藤由子『戦前の地理教師 - 文検地理を探る』古今書院，1988，44-61頁。
- 20 石田龍次郎「明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向」『地理学評論』44-8，1971，539頁。
- 21 既に以前から東京高等師範学校や東京女子高等師範学校では，地理担当の中等教員養成のために地理教育が行われ，1907年には京都帝国大学文科大学に地理学講座が開設されていた。
- 22 最初の学生として秋岡武次郎，飯本信之，佐藤弘が地質学科より編入され，地理学が東京帝大で本格的に研究されることになる。
- 23 長野の松本女子師範附属小学校で，臨時視学の樋口長一らが授業視察を行った。このとき四年生の修身授業を行った川井清一郎訓導は，国定修身教科書を用いず，森鷗外の『護持院原の敵討』を教材とした。視学らはこれを問題とし，結局川井訓導は公立学校職員分限令によ

- て休職処分を受けた。国定教科書を使わない授業が許されなくなる契機となる事件である。(山住正己『日本教育小史』岩波書店, 1987 参照)
- 2 4 文部省『学制百年史 資料編』(1972)より作成した。
- 2 5 日本地理学会編『日本地理学会五十年史』, 古今書院, 1975, 1 - 10 頁。
- 2 6 「文検」とは, 独学で師範学校・中学校・高等女学校の教員免許状を得ようとするものに対して, 文部省が行った試験制度であり, 1885 年に開始され 1943 年まで 78 回実施された。1896 年以降は予備試験と本試験の二段構えの方式が取られるなど, 実施方法には若干の変化があったものの, 58 年という長期にわたり行われた試験である。中等学校教員として高等師範学校卒業と同等の学力がありと国から認められるための試験検定制ということができ, その実施期間の長さ, 受験者の多さにおいて戦前の教育制度下では最大の資格試験というべきものであり, 教育界に広く影響力をもっていたといえる。(佐藤 1988)
- 2 7 佐藤由子『戦前の地理教師 - 文検地理を探る』, 古今書院, 1988, 44-61 頁。
- 2 8 佐藤(前掲 26)によると, 山崎の没後の文検は, 内田寛一, 田中啓爾, 飯本信之, 辻村太郎, 佐藤弘の 5 人体制が続き, 1943 年の文検制度廃止まで維持される。内容は五人の委員が一題ずつ出題するようになっていった。
- 2 9 山崎直方「高等中学校の地理科に就きて」1913, 山崎直方論文集刊行会『山崎直方論文集後編』, 古今書院, 1931, 573-582 頁。
- 3 0 前掲 29) 579 頁。
- 3 1 前掲 29) 580-581 頁。
- 3 2 山崎直方「地理学説の進歩と中等教育」1914, 山崎直方論文集刊行会『山崎直方論文集後編』, 古今書院, 1931, 583-594 頁。
- 3 3 前掲 32) 583-585 頁。
- 3 4 前掲 32) 594 頁。
- 3 5 山崎直方「時代と地理学」1918, 山崎直方論文集刊行会『山崎直方論文集後編』古今書院, 1931, 595-604 頁。
- 3 6 前掲 35) 604 頁。
- 3 7 山崎直方「国民教育に於ける地理学」1919, 山崎直方論文集刊行会『山崎直方論文集後編』, 古今書院, 1931, 605-618 頁。
- 3 8 辻村太郎「山崎博士と日本の地理学」『山崎直方論文集』古今書院, 1931, 32 頁。
- 3 9 その他, 山崎は「最後に当局者に望まんと欲する所のものは此等の教程は其大綱を示すに止めて彼の中等学校に於けるが如く詳細なる要目細目の類を定められざらんことである, 中等学校に於ては之が為に繩墨に束縛されて自由に斬新の教授を行ふことが困難である」とし, 教授する現場にある教員の自主性を確保することを主張している指導要目等にしばられず教師の自主性が保障される必要があることも主張している。
- 4 0 前掲 37) 611 頁。

-
- 4 1 前掲 37) 610-611 頁。
- 4 2 その他に, 1919 年論文では, 「初等教育, 中等教育に於ける仕事としてはそれ相応の程度に據つて常に此等学理の研究を實際問題に応用して, 民族として国民としての立場を明かに自覚せしめ其発展を授くるも亦一方法であります」とし, 民族として国民としての発展を確保するために, 地理学の理論を實際問題に適用することも述べている。
- 4 3 中村五六『中等地理』文学社, 1891。
- 4 4 この教科書は, それぞれの洲の冒頭には 2 色刷りの地図が掲載され, 直観教材としての挿図は 7 枚のみである。例えば, 「亜細亜諸邦風俗図」, 「土耳其人風俗図」, 「蘇士運河」, 「アマゾン河景」などである。
- 4 5 中村五六『中等地理』文学社, 1891, 429 頁。
- 4 6 松島剛『近世小地理学 外国之部』春陽堂, 1895, 34 頁。
- 4 7 「陸半球水半球」, 「アジアの山脈」, 「京城南大門」, 「纏足と骨の奇形」, 「シベリアの犬橇」, 「ワレス氏線」等がでており, 次第に挿図が増えていく。
- 4 8 山上万次郎編著『最近地理学教科書 外国之部 上中下』大日本図書, 1902, 262 頁。
- 4 9 また, 教科書の州別ページ数をみると, 日本に近いアジアに重点を置くことは当然のこととしても, ヨーロッパにもアジアと同等のページ数があてられており, 文明開化後のヨーロッパ文化を志向する日本政府の態度が教科書からもうかがわれるのである。
- 5 0 山崎直方『普通教育地理学教科書 地理学各論 外国誌 上中下』東京開成館, 1905, 45-46 頁。
- 5 1 アメリカ合衆国の農業においても, 同様に詳細な記述になっている。「国土の広大にして富源に富めると国民の勤勉なる美質とは, 実に此国の産業をして長足進歩なさしめ, 其規模の宏大にして産額の多きこと, 世界の第一位にあるもの少なからず。農業は最も盛にして, 小麦と玉蜀黍とは世界第一の産額ありて, 小麦粉のヨーロッパに輸出せらるるもの甚だ多し。綿花は南部諸州に最も多く, 実に世界産額の四分の三を供給し, 多くイギリスに送らる。牧畜は中部及び中部以東の高原, 平野に盛にして, 多く牛を畜ひ, 又豚肉は世界産額の三分の一を占む。西部カリフォルニア州は果実の産を以て表れ, 林業には亦カリフォルニアの巨樹最も名高く, 東北部よりも材木の輸出極めて多く, 水産亦此地方の近海に最も盛なり」とある。
- 5 2 1912 年訂正 8 版を参照した。
- 5 3 山崎直方『修訂普通教育日本地理教科書』開成館, 1908, 35 頁。
- 5 4 山崎直方『修訂普通教育日本地理教科書』開成館, 1908, 71 頁。
- 5 5 三省堂書店『最近外国地理 上中下』三省堂, 1905, 56-58 頁。
- 5 6 六盟館編集所『修訂外国新地理 上中下』六盟館, 1905。
- 5 7 山上万次郎著『最近統合外国地理 中学校用 上中下』大日本図書, 1905。
- 5 8 志賀重昂『地理教科書外国篇 上中下』富山房, 1905。
- 5 9 山崎直方「国民教育に於ける地理学」1919, 山崎直方論文集刊行会『山崎直方論文集後編』,

- 古今書院，1931，605-618頁。
- 60 山崎直方『普通教育世界地理 上中下』東京開成館，1905。
- 61 山崎直方『新制外国地理 乙表』東京開成館，1924，1-3頁。
- 62 山崎直方『新制外国地理 乙表』東京開成館，1924，1-3頁。
- 63 1908年初版 1926年(訂正22版)参照した。
- 64 山崎直方『普通教育日本地理』開成館，1926年，31頁。
- 65 青野寿郎『青野寿郎著作集 地理教育・自然保護』古今書院，1986，2頁。
- 66 石田龍次郎ら(1953)によると，中学校の地理が実体験から暗記物であることが多かったと指摘されている。また，「なぜお互いの国を知ったほうがいいか，こういうことを考えないで，ただこの国はこう，あその国はこうだ，とっていったんでは，百科辞典を講義して聞かせるようなものだ」とも述べている(135頁)
- 67 石田龍次郎・入江敏夫・小堀巖・馬場四郎・大村榮『地理教育の革新』同学社，1953，120-122頁。
- 68 東京文理科大学『東京文理科大学閉学記念誌』1955，271頁。
- 69 守屋荒美雄『最新系統地理 中学校用 外国之部 上中下』帝国書院，1911，例言。
- 70 石田龍次郎『地理学の社会化』古今書院，1958，41頁。
- 71 また，山崎は新設された地震研究所の所員を兼ね，1927年の奥丹後地震の際に生じた地震断層や，水準測量の結果から明らかになった現在の地殻変動と地形との関係などについて研究し，変動地形を指標として地殻変動を研究する地形学の分野を開拓した。
- 72 山崎直方「氷河果して本邦に存在せざりしか」1902，山崎直方論文集刊行会『山崎直方論文集前編』古今書院，1931，125-138頁。
- 73 丸山真男『日本の思想』岩波新書，1961，129頁。
- 74 工学博士。93年第25代東京大学総長に就任，97年退任した。東京大学人工物工学研究センターの計画を中心となって推進した。引用は「人工物工学の提唱」(<http://www.race.u-tokyo.ac.jp/~raceweb/about/documents/Yoshikawa.pdf> 参照)を参照した。
- 75 渡辺正雄『日本人と近代科学』岩波新書，1976，34-35頁。
- 76 米田俊彦『近代日本中学校制度の確立』東京大学出版会，1992，9頁。
- 77 阿部重孝「中学校」『阿部重孝著作集第4巻』日本図書センター，1983，178-183頁。
- 78 中川(前掲15)は，1916年に内田寛一が文部省図書官に就任する際に山崎の推薦をうけたことを指摘し，その教育界における山崎の影響力を述べている。
- 79 石田龍次郎「明治・大正期の日本の地理学界の思想的動向」『地理学評論』44-8，539頁。
- 80 1924年初版 辻村太郎補訂 東京開成館
- 81 山崎直方『新制日本地理 修正15版』開成館，1937，8頁。